

夜

横田瑚子

寒さが残る春の夜は、

手を繋いでいるような温もりと、

空っぽの部屋みたいな冷たさが混じりあって、

なんだかすこし気持ちが悪かった。

泥水みたいに濁った夜の帳に、

ドロっとした曖昧な空気が充満していた。

高架下に佇む黒い湖を見つめていると、

彼は僕に生ぬるい手を伸ばして、

なんだか官能的に頬を撫でた。

誘惑された桜の花びらたちは、

彼の汚い水に沈んで、

彼女たちの美しさは汚れになった。

彼に滲んだ醜い月は、

遠い記憶の中で失った誰かのようだった。

夜に嫉妬した光が晒した彼は、

夜道を寄り添う影のような顔をしていた。

彼に殺された彼女たちの死体は、

片目を潰して見ないふりをした。

遠くで唸る車の音も、

ずっと孤独な高架線も、

全部が僕の味方をしてくれた。